

「特別の教科 道徳」を考える

分科会に参加して

熊谷市立星宮小学校 除村美和

参加にあたり

今年度初めて設けられた特設分科会「特別の教科 道徳」を考える」の分科会。私は、昨年度「教育課程・教科書」の分科会で道徳の授業を中心とした内容のレポートを出した。今回は特設分科会となることや来年度、特別の教科として小学校では実施されることもあり、全国からいくつか実践レポートが出されるであろうと思った。また、前日に参加した教育フォーラム「学習指導要領が変わると子どもと学校はどうなる？」では「なぜ道徳教育だけのフォーラムを作らなかったのか」と参加者から意見が出ており、つどいの参加者の道徳に対する関心は高いことがわかった。

二日間の討論や自分の実践

分科会は出版労連1本、公立中学1本、私も含め公立小学校3本、私立小学校1本の計6本のレポートが発表された。山口の複式学級の小学校の実践は、レポートがゆいまるに参加した後、「対馬丸と日本国憲法について」、社会や道徳で子ども達と考えたものであった。道徳の副読本では義務は「守るべきもの」として大きく取り上げられているが、権利についてはあまり扱われていないことが多い。しかし、子どもの権利条約は道徳教科書に掲載している教科書会社もあると聞いた。教科書教材を取捨選択して扱えば道が少し開けるのではと思った。北海道の中学校の実践は、学年で取り

組んだ「思いやりって何だ？」をテーマに生徒に思いやりの内容の物語を創作させて、そこから始まった紙上討論であった。創作物語とはいえども、子ども達から出ている物語で意見を交換することで子ども達に返つていて、誰が書いたかは載せていないので、思春期の時期に言いたいことが言える環境の保証をしていると感じた。

兵庫の小学校の実践は、阪神大震災当時小学生だった教え子の話をし、被災体験による子どもの変化や教師の支援についてという内容だった。一教員として、子ども達をどのようにとらえ、耳をかたむけ、かかわりついていくかという日々の学級づくりを学べる実践であった。「特別の教科 道徳」とは少し違うが、学級づくりというところで道徳教育だから、この分科会なのだろう。私はここで疑問に思った。「道徳教育を考える」ではなく、「特別の教科 道徳」を考える」という分科会にしたのはなぜなのか。分科会に参加している50人くらいの人達は「特別の教科 道徳」は反対」と思っている。しかし、小学校は来年度から「特別の教科 道徳」の授業が始まる。さあ、どうしようか。全国のみんなで考えようという趣

旨で特設されたのではないか。それならば、「教材をどうするか。授業をどうするか。」をもっと意見を出して討論した方がよいのではないか。

私立小学校の実践は学級づくりの実践だった。作文を読み合い友達のものに寄り添ったり、みんなで悩みを話し合ったりと子ども達一人ひとりをつなげている。学校の道徳教育の方針が終わりに書かれていた。最初の項目はできないが、他の項目は公立の小学校でもできそうだ。

① 今後も「道徳」を教科とはしない。

② 平和と民主主義を求め「共に生きる」見方や考え方を教科教育や生活全般の中で育んでいく

③ 安心と安全の中で自由に表現し、対話を重ねていくことのできる空間を追求していく

④ 互いの要求を出し合い、子ども主体の学校作りの中で、主権者を育てていく私のレポートは「お互い高め合える仲間づくりを目指して」5年生11人との1年間」というタイトル。初めての高学年担任で、家庭や人間関係の悩みを抱えた子ども達と向き合った1年間を綴った。道徳の授業のこととクラスづくりについての内容だ。私は道徳授業を①既存の教

材を読み替える②既存の教材をカットしないバージョンで提示する③自主教材を使う④テーマで話し合うなどで行っている。ただ、ここには子どもから出発してないという問題点がある。内容は、民主主義、平和、人権、環境などがいいとは思っているが、なかなか教材を見つけない時間をとることが難いため、自主教材はあまり使っていない。今回のレポートは主に学級づくりについて書いた。11人という固定化された人間関係の中で子ども達をどうつなげるか。班リレー日記に取り組んだが、「〇〇をして楽しかったです。」という内容で、本当にそれを書いて伝えたいのか疑問が残った。一方で自主学习ノートに担任である私に向けて「しんどさ」を伝えてくる子や最近の友達の様子を日記にする子はいた。討論の中で、子ども達の話やつばやきを大事にしているけれど、子ども達同士をつなげるという視点がいまいち伝わってこないという指摘を受けた。これを聞き、私は2年前も同じことを別の場で言われたことを思い出した。人数が少ないからみんながみんな、1日に何回もかわるから。1からクラスづくりをしているわけではないから。言い訳をしていたのか

もしれない。嬉しいことは11倍に、悲しいことは1/11に。私のクラスづくりは、子どもから出たネガティブな感情をどうやってクラスで共有し、子どもに返すかが課題だということがわかった。

参加して

道徳の授業においては教材そのものを問うこと、そして主権者教育や多文化共生を目指して民主的な学校をつくることが大切であると共同研究者である大東文化大の渡辺雅之さんは討論をまとめていた。私は、ジェンダー平等や人権、平和、生活指導・自治的活動の分科会に提出されたレポートに私が考える道徳授業のヒントがあるのではないかと思った。それと同時に、来年度のつどいではいくつか対抗実践が出てくるのではないかとも思った。分科会参加者には、青年が約50人中5人程度しかおらず、青年の関心の薄さが気になった。埼玉でもそうかもしれない。小学校は教科書採択が終わった。いよいよあと半年。4月をどう迎えるか。仲間と学習していく必要があるか。と感じている。